



『水で生きる』

土佐町のホームページにはこう書かれている。

四国の真ん中に位置し、吉野川の源流域にある土佐町。

まちの東部にある早明浦ダムは、私たちの命や暮らしを支えてくれる『四国の水がめ』だ。

水を守り、水に親しみ、森を守り、人が生き生きと暮らすまちを訪ねた。

早明浦ダムと吉野川を包みこむ森と棚田

土佐町役場撮影



LOVE



SAMEURA

NPO法人 さめうらプロジェクト
理事長 辻村 幸生(ゆきお)さん

さめうら湖でのSUP体験。このような遊びやスポーツを通して、早明浦ダム役割や良さを知ることができる。



言葉の一言、一言から、さめうら愛があふれる辻村さん。事業方針は、【守る・遊ぶ・学ぶ】四国のいのち早明浦ダムを守り、イベント開催などにより、地域力を高め、地元若者たちのいきいきとした人間形成の場として育てている。

通称『ラブさめ』。さめうらプロジェクトは、さめうら湖面利用者の管理、利用ルールの周知、パトロール、地域イベントの開催などさまざまな活動を行っているさめうら湖を愛する人の集まりだ。

もともとダム湖は、利用者が安全に配慮し、事故防止につとめる自由利用とされる。しかし、さめうら湖では利用者の増加により、自然環境への影響や、水質事故などの発生が懸念されるようになり、平成16年6月に湖面利用者が中心となって運営する『湖面利用者協議会』が発足、その代表となったのが辻村さんだ。その後、平成24年4月にNPO法人さめうらプロジェクトとなった。

まず、とりかかったのは、国土交通省や流域町村などからなる上部組織『さめ

うら湖協議会』が策定したさめうら湖利用計画に基づく『早明浦ダム湖面利用規則』の徹底だ。このルールにより、ダム湖での船の利用は登録制となった。ルールの決定には、当然反発も出る。そこで行ったのが、平成18年に開催した『ラブさめミーティング』。湖面での釣りを通して、ルールを学び、みんなで言いたいことを言おうじゃないかという会だ。以来、地道にルールの徹底を呼びかけてきた。その根底には、ダム湖というフィールドを使わせていただいているものにとって、ダムの機能を守ること、周辺の環境を守ることは使命、そして水源地域への深い感謝の思いがある。

日本一愛される湖、さめうらダム湖を目指し1,000人の会員とともに、これからも活動は続いていく。

より詳しい活動内容については、

<http://lovesameura.com/>



シーバード水上訓練の様子。さめうらプロジェクトでは、『シーバードさめうら』という水上部隊がさめうら湖の安全を守っている。



※辻村さん以外の写真については、NPO法人さめうらプロジェクト提供。

森とともに

さめうら水源の森ネットワーク

代表 川村 雅士さん



1ヶ月に1度開催しているさめうら水源の森での整備活動。健全な森づくりの先導的役割を果たしている。



吉野川水源である嶺北地域の森を守っていくことが、徳島、香川にまで流れていく吉野川の水質を良くすることにつながる。森を守ることは、嶺北地域に住む私達の使命だと話してください。

四国の水がめ「早明浦ダム」。「四国はひとつ、四国の森はひとつ」の理念のもと、平成17年に設立されたのが「さめうら水源の森ネットワーク」だ。荒廃が進む吉野川流域の森林を本来のあるべき姿に一歩一歩再生していくために、地元森林ボランティアと四国四県のボランティア団体、市民が協働して活動が行われている。

水源地の保全、毎月の森林整備、地域活性化など活動内容は多岐に渡っている。特徴的な活動が、上流域で行う「木の駅」と、下流域の住民が参加して行う「森の健康診断」だ。独立行政法人水資源機構吉野川局と協働で実施している。「木の駅」とは、地域自治体及び地元企業の協力を得て、間伐材を適正価格で買い取ってもらうシステム。山主は、山で間伐されないまま放置されている森林を適切に間伐し「木の駅」に出荷する。出荷された間伐材は、チップ材、バイオマス燃料など有

効に使用される。山主は出荷量に応じた有価の「 Mori券」を受け取ることができる。

「 Mori券」は、地元の小規模店舗のみ使用できる商品券となり、地域経済の活性化にもつながっている。

「森の健康診断」は、早明浦ダムの恩恵を受けている下流域の人々（香川県、徳島県）が早明浦ダム周辺の山林に入り、森林の状況調査を実施するというもの。年に1回参加者を募り実施。毎回70名程度が参加している。地元サポーターの協力により、スギやヒノキの混み具合を簡単な道具で調べ、植物の葉が地面を覆っている割合、落ち葉や土壌の厚さなどを観測・計測する。診断の結果は、研究者の手によって分析を行い、報告書にまとめられ、行政や山主を動かす「森林のカルテ」になる。源流域を守ることが、吉野川流域の水質を守ることになるという思いで日々活動されている。

木の駅での荷下ろし状況



森の健康診断



※川村さん以外の写真については、さめうら水源の森ネットワーク提供。



木 とふれあう

さめうら工房

代表 伊藤 弘康さん

「吉野川源流域でたくさんの思い出を作ってほしい。実際に木を見て、触れて感じてもらいたい」と伊藤さん。にこやかに森の役割や、木の特徴について教えていただいた。

木工クラフト体験で完成した作品。世界に1つだけのオリジナル作品をつくることができる。作っていると自然と夢中になり、笑顔になる。木工クラフトでは物語を表現する子どももいるそうだ。大人も子どもも楽しめる。料金は10名より人数に応じて要相談(出張開催可)。問合せは道の駅「土佐さめうら」まで。



さめうら工房紹介
ホームページ



豊かな嶺北の森。森林の大切さや、役割を知ってもらおうと結成されたのが、さめうら工房だ。道の駅土佐さめうらを拠点に活動を始めて13年目を迎えた。メンバーは代表で大工の伊藤 弘康さん、林業家の筒井 順一郎さん、大工の稲村 道男さんの3名。森や木に関わるプロの方々ばかり。

吉野川源流域の森林の大切さについて学びたいと、早明浦ダムの恩恵を受けている香川県在住の中学生など、年間1,500名がさめうら工房で、森のことを学び、木工クラフト体験等を行っている。また、さめうら工房メンバーが、香川県内の学校を訪問する出張木工教室も実施。木工教室で最初に必ず行っているのが「森について」。森のはたらきや、間伐、木の年輪の数え方、木材についてなど、森林と木、暮らしと木の関わりについて、学ぶ場となっている。

木工体験も屋外と屋内どちらの選択もできる。屋外であれば、自分たちで間伐した

木を使ってベンチ作りもできる。間伐体験からはじまり、自分たちが伐採した木が、ベンチの大きさに切られていく製材過程も見学。製材された木でのベンチづくりと、まさに森からはじまり、自分たちで作る喜びも感じられる本格的な体験となっている。屋内では、木工クラフトや間伐材を使用した本立て、プランターなどを作ることができる。

今回は、長方形の板に枝や木の実等飾り付けをしてオリジナルの作品を作る木工クラフト体験をしながら、伊藤さんにいろいろと木のお話もしていただいた。スギの板の上に思い思いの作品をつくっていく。始めは1枚の板。この上に、マツボックリや木の実、小さい木など、色々な組み合わせで自由自在に表現ができる。さめうら工房のみなさんが手間をかけて用意をしてくださった森の材料。ドングリは虫がでないように煮沸し、乾かしたものを用意している。ひとつひとつの材料に愛情がこめられている。

観光・情報の発信の場として 道の駅「土佐さめうら」



平成10年にオープンした道の駅「土佐さめうら」。「さめうら観光協会」が建物内にあり、道路案内をはじめ、嶺北の観光情報も発信している。休憩所としてトイレやシャワーも完備。地元の産品や民芸品の展示、販売も行われている。

町をあげて売り出しているのが、高知県固有の褐毛（あかげ）和牛「土佐あかうし」だ。道の駅がある国道439号線沿いを「土佐あかうし街道」と名付け、道の駅や、各店舗等が参加し、スタンプラリー等を実施した。道の駅では手ぶらで来ても、ウッドデッキを利用してバーベキューもできる。

地元の特産品の開発にも力を入れ、土佐町在住のデザイナーによる「サメウラマニアック」ブランドも作られた。土佐町役場の職員の方々も「サメウラマニアック」のロゴがついたポロシャツ等を着用して仕事をする徹底ぶり。

世界を放浪した後、土佐町に拠点を移し、アーティスト活動をしている作家の陶芸作品コーナーなどもあり、色々と見ているだけでも、時間を忘れてしまう。

道の駅土佐さめうら駅長 和田啓士（けいし）さん。民泊を推進し、土佐町への修学旅行誘致などにも力をいれている。「土佐町は四国の真ん中でどこにでも行きやすく、自然も豊かで住みやすい」と教えていただいた。子どもたちからの要望もあり「駄菓子」コーナーも作りたいと検討中。



「土佐あかうし」



笑顔で迎えてくれたスタッフの杉本久子さん（右）と上堂園（かみどうぞの）えりなさん。



アーティストの作品 食堂も併設れいほく牛丼 開設時間900~1800

アクセスマップ



道の駅「土佐さめうら」

〒781-3521高知県土佐郡土佐町田井448-2

TEL 0887-82-1680 FAX 0887-82-1707

